

灌頂儀礼とその信仰

高野山大学

佐藤隆彦

空海は『弁頭密二経論』において頭教は応化仏が説いたものであり、対機説法であると規定する。それに対して、密経は法身仏の説法であり、如来内證智をそのまま説いたものとする。これが『弁頭密二経論』で説かれる頭密二教判である。この頭密二教判にもとづけば、密教は人間世界から隔絶された絶対的な世界の説であるといえなくもない。まさに密教が密経といわれる所以である。

それでは、この如来内證智の境界、すなわち密教がどのようにして人間世界に流伝するであろうか。本来は隔絶されたはずの密教の世界が、どのようにして我々と関わりを持つのであろうか、それを説いたものが『付法伝』である。『付法伝』では、如来内證智が灌頂を通して人間世界に流伝することが説かれる。敢えて言えば、『付法伝』は如来内證智の境界である密教が人間界に流伝する系譜を記したものだといえる。この点について発表者は、すでに日本仏教学会において「真言宗における灌頂の意義」と題して研究発表を行った（『仏教における日常生活』（19988-8））。

今回の発表ではさらに前回の発表をうけて密経教理と灌頂との関わりをもう少し踏み込んで述べたい。特に空海の教理に関する著述の中で灌頂に関わる部分がどのように取り扱われているかについて述べたい。たとえば『即身義』の中においても灌頂と関わる部分があるが、それらの部分について実践面からの視点をもって考察をしてみたい。それによって、空海の教理書と考えられている書物が、単に客観的な論理構造だけで構成されるものではなく、むしろ宗教体験や灌頂儀礼等の密教実践を背景として成立していることの一端を説き明かしたい。それらの操作によってこそ、本来密教がもつ世界の構造を明らかにしえると考えるからである。

また、灌頂儀礼は、如来内證智を伝える働きをもつものであるが、そのことはおのずと「信」あるいは「信仰」とも深い関わりを持つ。なぜならば、灌頂で示される世界は「唯佛与佛」の境界そのものである。そこで、灌頂という宗教儀礼が密教の中でどのような位置を占めるのか、灌頂という儀礼の中で「信」がどのような役割を果たすかについても明らかにしたいと考える。

キーワード 頭密二教判 如来内證智 『付法伝』 灌頂